

ブタテンちゃん

2025年 立花吾孺の森小学校

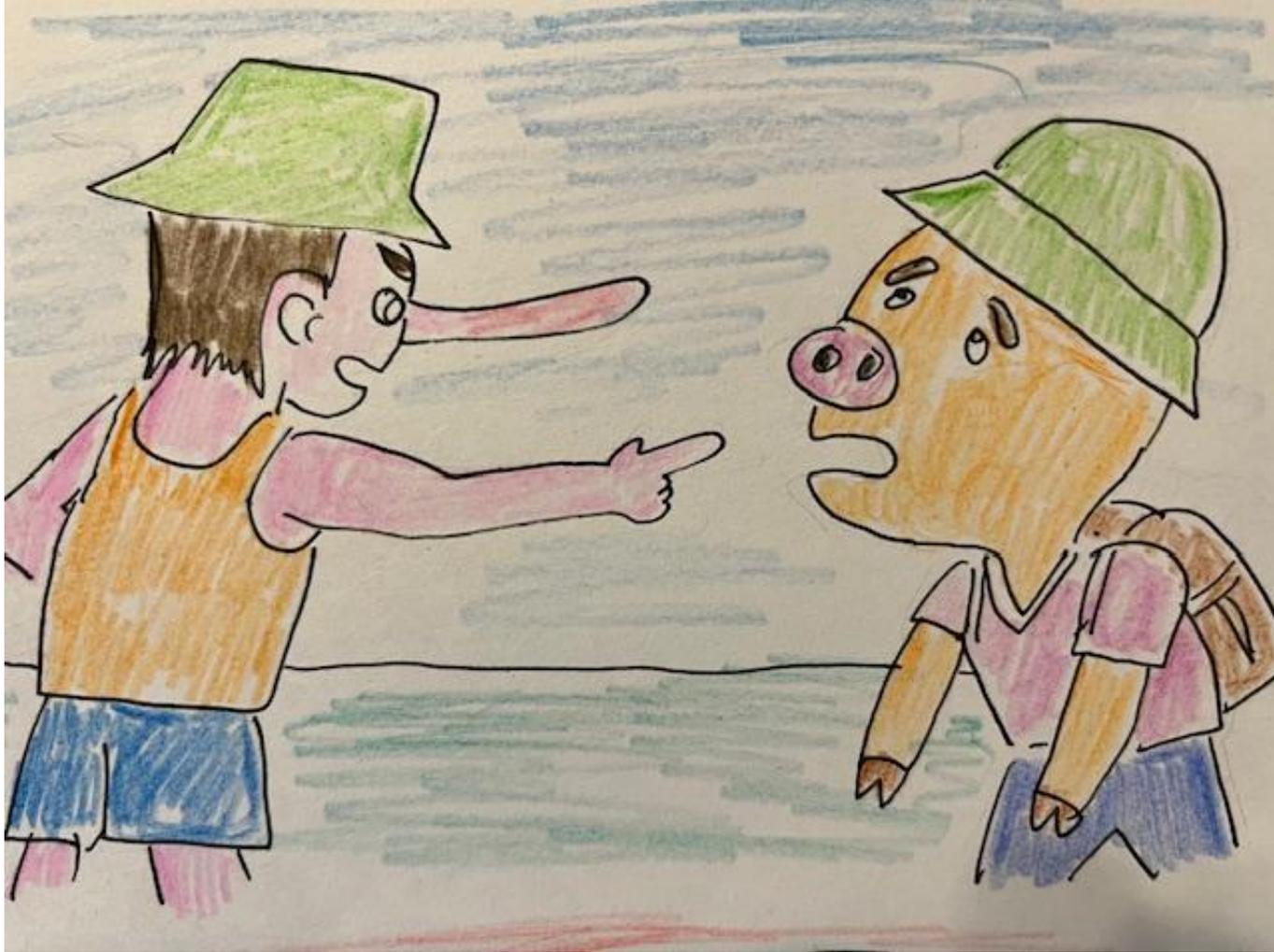


なかよしの森小学校には、たくさんの動物や森に住む不思議な生き物が通っています。生活の仕方はみんなちがうのですが、なかよくくらしていました。



その中に、一人だけ、いつもみんなとちがうことをしてまわりを困らせているお友だちがいました。

てんぐのテンちゃんです。テンちゃんは誰よりも足が速く、運動が得意なのですが、いじわるなところがありました。



足のおそい豚ちゃんと競争して、足がおそいことをわらったり、豚ちゃんの鼻がぺったんこであることをばかにして笑ったりしていました。



それでも豚ちゃんはおこったりはせず、テンちゃんの足が速いことをほめたり、どんなスポーツもとくいなところを「すごいだね」といってほめていました。



どうしてこんなにやさしいのか
というと、もっともっと小さい
頃、二人は仲良しだったからな
んです。

実は同じ病院で、同じ日に生ま
れ、同じ保育園に通い、いつも
ニコニコ楽しく遊んでいたから
なんです。

豚ちゃんは、テンちゃんは本当
はやさしいんだと信じているん
です。



それなのに、今日の帰り道でも、
テンちゃんはいつものように意
地悪をしてきました。

「豚ちゃんの足は何で短いの、
豚ちゃんの鼻は何でぺったんこ
なの」



次の日の朝、起きてみると、町中が真冬のような寒い朝になっていました。霜もあり、氷もはっています。学校までの道路の上には、あちこち水たまりが凍っています。

「みんなおはよう、気をつけて歩こうね。」白い息をはきながら調ちゃんが声をかけてきました。

「ゆっくり歩こうね。」



そんなとき、後ろの方から、テンちゃんの大きな声が聞こえてきました。

「おらおらおらおら、どけどけてんぐ様のお通りだーい」

寒いからでしょうか。
ポケットに手を入れて、早足で近づいてきました。



「テンちゃん、ポケットに手を入れて歩いていると、転んで大変なことになるよ」

豚ちゃんは大きな声で教えてあげました。

「大丈夫、大丈夫、豚はどいてろー！へへへい」

テンちゃんは、豚ちゃんの横をポケットに手を入れたまま走り抜いていきました。

「あぶないよー」豚ちゃんは叫びました。テンちゃんはもう見えなくなっていました。



学校に近づいてきました。何だか、騒がしくなっているのに気がつきました。何か、大変なことが起きたようです。

みんなの輪の中から大きな、大きな泣き声が聞こえてきました。それはテンちゃんの声でした。

「えーん えーん ころん
じゃったよ、そして大事な大事な鼻を地面にぶつけてしまったよー いたいよ、いたいよ」



心配になった豚ちゃんがかけてみると、そこには鼻がおれてしまったテンちゃんがありました。

「だいじょうぶ、テンちゃん？」

「ぼく、ポケットに手を入れて走っていて転んじゃったんだ。豚ちゃんの言うことを守れば良かった。大事な鼻が折れちゃったよ。どうしよう。」

そんなテンちゃんの顔を見て、豚ちゃんは驚いてしまいました。テンちゃんの顔が、豚ちゃんとそっくりになっていたんです」



「テンちゃん、ぼくとそっくりだよ！見てごらん。」

「ほんとだ ぼくの顔、豚ちゃんになっている おもしろいね」

「今日からテンちゃんは、ブタテンちゃんだ！ また、いっぱい、いっぱい仲良く遊ぼうね。それから、ポケットに手を入れて歩くのはやめようね。。」

「うん」テンちゃんは、泣きながら笑いました。

おわり

2025年 立花吾孺の森小学校
越智 健一郎 作画